

NEWS LETTER

日本の歴史研究を次のステージへ

VOL. 2
2017.3



CONTENTS

- 「総合資料学の創成」のための学術交流・協力に関する協定締結と奨励研究の実施
.....メタ資料学研究センター 2
- 国際展示「台湾と日本—震災史とともにたどる近現代—」を開催
.....メタ資料学研究センター長・研究代表 西谷 大 3
- 国立歴史民俗博物館共同研究
「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」
・これまでの活動
ワークショップ1 第2回..... 研究副代表 後藤 真 4
ワークショップ1 第3回..... 研究副代表 後藤 真 5
ワークショップ2 第2回.....小倉慈司 6
ワークショップ3 第1回.....三上喜孝 7
ワークショップ3 第2回...メタ資料学研究センター長・研究代表 西谷 大 8
大学博物館等協議会・博物科学会(ポスター報告)..... 研究副代表 後藤 真 9
全国歴史民俗系博物館協議会 第5回年次集会(報告)
.....メタ資料学研究センター長・研究代表 西谷 大 10

海外での報告

- PNC(Pacific Neighborhood Consortium)(報告) ... 研究副代表 後藤 真 11
- EAJRS(日本資料専門家欧州協会)(ワークショップ) 渋谷綾子 11
- ・他機関における活動のご紹介
千葉大学と国立歴史民俗博物館の包括的連携協力協定の目的と目標について
.....千葉大学 崎山直樹 12
総合資料学奨励研究「地域歴史資料の研究利用促進にむけた環境整備の試み—佐賀大学附属図書館所蔵小城鍋島文庫「小城藩日記」データベース構築—」について
.....佐賀大学地域学歴史文化研究センター 伊藤昭弘 13
- 研究メンバー一覧..... 14
- メタ資料学研究センター・メンバーの紹介・新刊紹介・歴博 関連する企画展
..... 15
- 2016年10月~2017年 メタ資料学研究センターの活動 16

「総合資料学の創成」のための 学術交流・協力に関する協定締結と奨励研究の実施

国立歴史民俗博物館（以下、歴博）メタ資料学研究センターでは、人文科学・自然科学・情報工学など多分野の研究資源を活用した情報基盤を構築し、歴史資料に関わる研究や教育の方法などを創出するため、大学や研究機関・博物館との連携を行い、研究を進めている。これまでの研究・展示・教育活動における連携をもとに、平成28年度は下記8機関と研究連携や学術交流のための協定を締結した。

平成28年度の協定締結一覧

- 4月1日 国立大学法人神戸大学大学院人文学研究科との学術交流に関する協定
- 4月1日 東京医療保健大学との学術交流・協力に関する基本協定
- 6月29日 東京都江戸東京博物館との学術交流・協力に関する協定
- 7月26日 法政大学国際日本学研究所との学術交流に関する協定
- 10月7日 国立大学法人千葉大学との包括的な連携・協力に関する協定
- 11月1日 国立大学法人東京大学史料編纂所との学術交流・協力に関する協定
- 11月24日 大韓民国国立ハングル博物館との学術研究交流に関する協定
- 11月29日 国立大学法人佐賀大学地域学歴史文化研究センターとの連携・協力に関する協定

(表紙写真は佐賀大学との協定締結の様子)

可能なかぎり多くの大学と協定を結び、大学内に集積された多くの資料を共有化することは、新たな研究・教育の資源としての活用を可能にさせる。多くの大学は、地域社会の資料も調査・研究、収蔵するとともに、地域社会のなかで大学が果たすべき役割のため、地域の博物館との連携も求められている。大学と博物館の相互の資料を結びつけ、大学における歴史学および地域社会についての研究・教育機能を強化する条件を整備することは、新たな研究を生み出し推進することにつながる。さらに、海外の大学・研究機関・博物館にも多くの日本に関連する資料が眠っている。

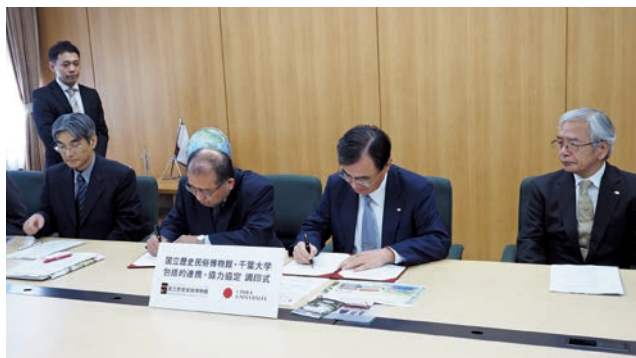
こうした大学・研究機関・博物館などとの協定に基づく学術研究交流を進めて、「総合資料学」をより拡げていくつもりである。

また、メタ資料学研究センターが実施する共同研究として、下記2件の平成28年度総合資料学奨励研究（公募型）の課題を採択した。

- (1)「荘園絵図を中心とした、総合的な資料分析のためのデータ構築研究」（東京大学史料編纂所・山田太造ほか5名）
- (2)「地域歴史資料の研究利用促進にむけた環境整備の試みー佐賀大学附属図書館所蔵小城鍋島文庫『小城藩日記』データ」（佐賀大学地域学歴史文化研究センター・伊藤昭弘ほか6名）

(1)は東京大学史料編纂所と歴博で進めている荘園の総合的研究について、より広範な研究として進めるべく、新たな形でのデータ構築とそのための分析を行うものである。(2)は佐賀大学附属図書館所蔵『小城鍋島文庫』の「小城藩日記」の記事データベースを作成し、共同研究の成果として日記の記事情報をより詳細に提供することで、資料利用者が求める記事によりアクセスしやすい環境を作ることを目指すものである（本紙13ページも参照）。

このように、各大学の研究者との間で共同研究を立ち上げ、日本歴史に関する資料の文理を問わない多様な研究を進めている。



国立大学法人千葉大学との包括的な連携・協力に関する協定締結の様子

国際展示「台湾と日本 —震災史とともにたどる近現代—」を開催

総合資料学の一環として、国際展示「台湾と日本—震災史とともにたどる近現代—」を開催した（開催期間：2017年（平成29）1月11日（水）～2月19日（日）、会場：国立歴史民俗博物館 企画展示室B）。

総合資料学は、人文系と理系が協同しながら、歴史資料に様々な分野から新たな視点を与え、深くほりさげた研究を進めながら、さらにその成果を広く市民に公開するだけでなく、大学教育にも反映させることを目的としている。

今回の国際展示の背景には、国立歴史民俗博物館（以下、歴博）と国立台湾歴史博物館の間で2014年7月に学術研究交流協定が締結されたことがある。協定事業の1つとして、国際企画展示「歴史のなかの震災」が提案され、2015年11月には両館の間で「展示協力協定書」が締結された。その上で企画された国際展示である。

ここでは、上記総合資料学の目的に即し、この国際展示のどこが総合資料学と密接に関係しているのか紹介してみたい。

この展示では、人文系と理系のさまざまな分野の台湾や日本の研究者が協力することで、これまでにない資料の見方や歴史に関する新たな視点が生まれた。

例えば地震を発生させるメカニズムを例にとると、近現代史において、台湾で地震が発生すると、日本でもほぼ同時期に地震が発生していることがわかる。これは台湾と日本が、実は海溝帯・地溝帯を通じて接続している「一蓮托生」といってもいい地域であることによる。しかしこれまでは、台湾・日本それぞれの地域で、それぞれが研究を進めてい

た。今回、その枠組みを越えて、大きく一体的なものとしてみるという視点を得ることができた。

本展示は、大きく分けて2つのパートで構成されている。まずは、日本の台湾領有後の地震被害や救援・救済、復興などの特徴を明らかにし、台湾・日本間の深い関係について考えた第1章である。地震は自然現象ではあるが、その発生により、その時代が抱える政治・経済・社会の問題を浮き彫りにする。台湾の震災への対応を通して、当時の日本の政治的影響力をみることができるだろう。

第2章では、民族的に多様な人びとによって構成される台湾で、彼らが復興を通じて自らのアイデンティティを問い直していったこと、そして震災復興後も続く地域づくりの過程に焦点をあてながら展開した。

展示は終了したが、ご興味のある方は是非、図録などをご覧くださいいただければと思う。

（メタ資料学研究センター長・研究代表者 西谷 大）



国立台湾歴史博物館での資料調査風景



展示会場での記者会見の様子

左から：謝長廷（台北駐日経済文化代表処代表）、久留島浩（国立歴史民俗博物館館長）、王長華（国立台湾歴史博物館館長）、邱君妮（総研大博士後期課程・通訳）、荒川章二（国立歴史民俗博物館教授）



被災した状態で保存されている武昌宮（西谷大撮影、2016年）

これまでの活動

ワークショップ1 第2回

研究副代表 後藤 真

日時 2016年9月12日(日) 15:00~18:00

場所 東京大学本郷キャンパス 福武ホール

このワークショップは、JADH (Japanese Association for Digital Humanities・日本デジタル・ヒューマニティーズ学会) との共催で国際シンポジウム「デジタル時代の歴史資料へのアクセス・分析と人文学—総合資料学と Digital Humanities」として開催された。

ハーバード大学よりPeter・K・Bol氏を招聘し、また国際学会と共催することで多くの国外所属研究者の参加も得ることができた。

Peter・K・Bol氏からは、特に人文資料や歴史資料に関わるデータをどのようにデジタルデータとして活かし大学の教育等に活用しているかの事例をご紹介いただいた。人文学の基本的な重要性を指摘し、それを学ぶためのデジタルツールのあり方について、ご講演をいただいた。

久留島典子氏からは、東京大学附属図書館における新図書館計画に関連して、歴史資料やデジタル学術資産を実際にどのように保全し活用していくのかという点について、ご報告をいただいた。

小島道裕氏からは、歴博の洛中洛外図人物データベー

ワークショップの内容

◆ 講演1

“The Humanities, the Liberal Arts and the University in a Digital World”

報告者：Peter・K・Bol (ハーバード大学)

◆ 講演2

「学術資産とデジタルアーカイブズ」

報告者：久留島典子 (東京大学)

◆ 講演3

「描かれた都市の暮らしをDBに—16世紀の洛中洛外図屏風人物データベース—」

報告者：小島道裕 (国立歴史民俗博物館)

◆ パネルディスカッション

司会：後藤 真 (国立歴史民俗博物館)

スの説明とともに、人物の知識情報をつなぐことでわかる歴史の意義やより深い理解につなぐことが可能であるということを実際の資料をもとに、報告があった。



講演1 (Peter・K・Bol氏)



パネルディスカッションの様子

ワークショップ1 第3回

研究副代表 後藤 真

日時 2016年12月9日(金) 15:10~18:10

場所 国文学研究資料館 オリエンテーションルーム

9月にJADHと共催した国際シンポジウム「デジタル時代の歴史資料へのアクセス・分析と人文学—総合資料学とDigital Humanities」(4ページ)の成果を踏まえ、このワークショップでは、特に日本においてデータ化された歴史資料や成果について、どのような形で活用可能なのかの検討を深めることを目指した。そこで、情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウムと共催のセッションとし、「歴史情報データはどのように研究・教育で活用されるのか」と題してお二方にご登壇いただき、研究報告と討論を実施した。

討論では、下記のような点が話し合われた。

宮中儀礼など、資料が少なく詳細に諸説あるような題材の3D化を試みることは、研究においても、より効果的な学説比較が可能となるなどの好影響が認められる。今の歴史研究で「わかっていない部分はどこか」が明確になることで、新たな資料研究を可能にする部分があるのではないか。



研究報告(岡田義広氏)

ワークショップの内容

- ◆ 全体説明
「国立歴史民俗博物館が進める「総合資料学の創成」と情報基盤—これまでの経緯を含めて—
後藤 真(国立歴史民俗博物館 准教授)
- ◆ 研究報告
「ICT活用による歴史学教材開発」
岡田義広(九州大学 附属図書館付設教材開発センター長)
- 「研究資源の蓄積と利活用を目指した学術資源リポジトリについて~ヴァーチャル・ミュージアムからサブジェクトリポジトリ、そして今後~」
高田良宏(金沢大学 総合メディア基盤センター 准教授)

大学の研究者側で自分たちの研究資料を保存することにも限界がある。大学の持つ様々な資料を(歴史的なものであっても文理を問うものではない)、研究の過程から保存していくことが必要であろう。



研究報告(高田良宏氏)

ワークショップ2 第2回

小倉 慈司

日時 2016年11月13日(日) 10:00~13:18

場所 神戸大学大学院人文学研究科A棟1階 学生ホール

2016年(平成28)11月13日、総合資料学のワークショップ2 第2回を神戸大学にて開催した。

報告1「地域文化と薬草栽培の叡智：森野旧薬園から発信する生薬国産化のキーテクノロジー」は、ゲストスピーカー高橋京子氏による大阪大学が現存日本最古の私設薬草園である森野旧薬園(奈良県宇陀市所在)と協力して進めている調査研究とその意義についての報告。「生薬」と「薬用植物」「薬用作物」の違いから始まる大変わかりやすい説明で、大阪大学における医薬学・理学・農学分野の横断形連携研究、また地域連携のあり方、さらに薬園の維持や物品の保存等の問題など、歴博として総合資料学を展開していく上でも多く参考とすることができると感じた。

報告2「総合資料学と「文献史学」—中世日本国際交流史研究の立場から—」は、中世日本国際交流史研究の現状と課題を紹介しつつ、現在、報告者が進めている歴博共同研究から総合資料学研究の一事例として、



日本・中国・韓国の伝統医療の比較(報告1)



近世対馬の気象記録から中世海上交通のあり方を探る(報告2)

ワークショップの内容

◆ 開始(10:00)

◆ 館長挨拶

◆ 報告1

「地域文化と薬草栽培の叡智：森野旧薬園から発信する生薬国産化のキーテクノロジー」

報告者：高橋京子

(大阪大学総合学術博物館・同大学院薬学研究科)

◆ 報告2

「総合資料学と「文献史学」

—中世日本国際交流史研究の立場から—

報告者：荒木和憲(国立歴史民俗博物館)

◆ 終了(13:18)

島根県益田市中須東原・西原遺跡出土の朝鮮陶磁をテーマに取り上げたもの。対馬周辺の海流や気象状況等といった自然事象や、和船の構造、政治情勢等、視野を広げて多角的・総合的に把握検討することにより、豊かな歴史像が引き出せることを具体的に示す内容であった。

討論では2報告に関する質疑応答に加え、総合資料学の方向性や資料の共有化についても活発な議論がなされた。

なお、ワークショップ終了後には、歴史資料ネットワークが毎週日曜日に実施している東日本大震災被災資料のドライクリーニング作業を見学した。



討論

ワークショップ3 第1回

三上 喜孝

日時 2016年7月8日(金) 9:30~14:30

2016年(平成28)7月8日(金)に、総合資料学のワークショップ3を開催した。このワークショップ3では、大学や博物館等とともに、「総合資料学」に基づく研究成果を大学や地域社会に還元するモデルを作ることを目的としている。ワークショップ1および2の成果から、各大学・博物館等を通じて地域歴史像を解明し、研究成果を発信するとともに、教育プログラム・展示による普及活動などのアウトリーチを目指す。

初回となるこの回では、全体の構想の中でのワークショップ3の位置づけと、ワークショップ1と2の館内担当者がそれぞれの目的と検討の状況について報告を行い、それらをどのように活用していくのかについて意見交換を行なった。

今回は、総合資料学が地域の大学や博物館とのかかわりにおいてどのような展開が可能かという点を意識して、発表ならびに意見交換を行なった。地域の学術研究を支えるための総合資料学という方向性をあらためて確認した。



金沢城公園の巡見



報告会の様子(話題提供2)

巡見(9:30~11:00)

- ◆ 巡見場所：金沢城公園
- ◆ 講師：金沢城調査研究所々長 木越 隆三氏
- ◆ 行程：
玉泉院庭園 → 第六旅団司令部 → 新丸 → 大手門 → 河北門 → 橋爪門 → 五十間長屋 → 極楽橋 → 三十間長屋 → 辰巳橋跡(本丸) → 石川門

金沢城公園整備事業に伴う発掘・史料調査を主導する金沢城調査研究所々員の方のご案内で、調査成果に基づく復元整備の実際を巡見した。

ワークショップ3 報告会(12:30~14:30)

- ◆ 会場：金沢商工会議所会館 研修室1C
(石川県金沢市尾山町9-13)
- 「博物館資料およびそれを生かした研究データを活用した博物館での展示・教育活動モデル構築について」
- ◆ 1. 話題提供
「総合資料学の全体像とWS3の位置づけ」
報告者：西谷 大(国立歴史民俗博物館)
- ◆ 2. 話題提供
「総合資料学における博物館資料データベースの地域活用に向けて」
報告者：後藤 真(国立歴史民俗博物館)
- ◆ 3. 話題提供
「『地域の学術文化の復興』と総合資料学」
報告者：三上喜孝(国立歴史民俗博物館)

ワークショップ3 第2回

メタ資料学研究センター長・研究代表 西谷 大

日時 2016年10月23日(日)～10月24日(月)

場所 国立歴史民俗博物館 大会議室・アーカイブ室

2016年(平成28)10月23・24日の両日、ワークショップ3の共同研究を、国立歴史民俗博物館で開催した。

初日は、藪田貴先生(兵庫県立歴史博物館館長。関西大学名誉教授。専門は日本近世史)に「日本学と総合資料学—メタ資料学研究への期待と課題」、小谷竜介先生(東北歴史博物館学芸部学芸班副主任研究員。専門は民俗学)に、「東北歴史博物館資料管理システムの理念と実際」という題目でご報告していただいた。その後、活発な意見交換を行なった。また二日目は、歴博のアーカイブ室において、資料の閲覧を行なった。

さて、藪田先生のご報告では、兵庫県立歴史博物館と兵庫県立博物館協会の現状と課題、近世史研究者として史資料認識の深化と変化、海外特にヨーロッパにおける日本在外資料の研究、さらには先生が行われてきた在外資料研究の具体例と、研究を実現、維持、発展させるための織論にまで話が及んだ。

特に強く印象に残ったのは、在外資料研究には、今発見されている資料を研究するだけでなく、まだ発見されていない資料を研究し資料化する必要がある、そこにこそ総合資料学がリンクすべきではないかという指摘である。

東北歴史博物館の資料管理システムは、非常に完成度が高いが、その構築に中心的な役割を果たされてきたお一人が小谷先生である。具体的なシステムの内容を、詳細に説明していただいた。もちろん資料のデータ化・整理のための人手不足といった直面する問題もあるが、資料管理システムを構築するにあたり、明確な理念が背景にあることが、「使える資料管理システム」につながるという思いを強くした。

また総合資料学への具体的な提案として、モノ資料に対して、付加情報を参加型とし、資料化運動のような展開も1つの方法ではないかという貴重な意見もいただいた。

ワークショップの内容

2016年10月23日(日) 14:00～18:00

◆ **場所**：国立歴史民俗博物館大会議室

14:00～14:10 挨拶・連絡

14:10～15:10 報告1

「日本学と総合資料学
—メタ資料学研究への期待と課題」
藪田 貴(兵庫県立歴史博物館)

15:10～15:20 休憩

15:20～16:20 報告2

「東北歴史博物館資料管理システムの理念と実際」
小谷竜介(東北歴史博物館)

16:20～16:30 休憩

16:30～18:00 意見交換

18:00 終了

2016年10月24日(月) 9:00～10:30

◆ **場所**：国立歴史民俗博物館アーカイブ室

9:00～10:20 歴民カード(歴史民俗資料調査カード)
の閲覧

10:20～10:30 連絡



報告1の様子



歴民カードの閲覧

大学博物館等協議会・博物科学会（ポスター報告）

日時 2016年6月30日(木)～7月1日(金)

場所 広島大学・東広島キャンパス

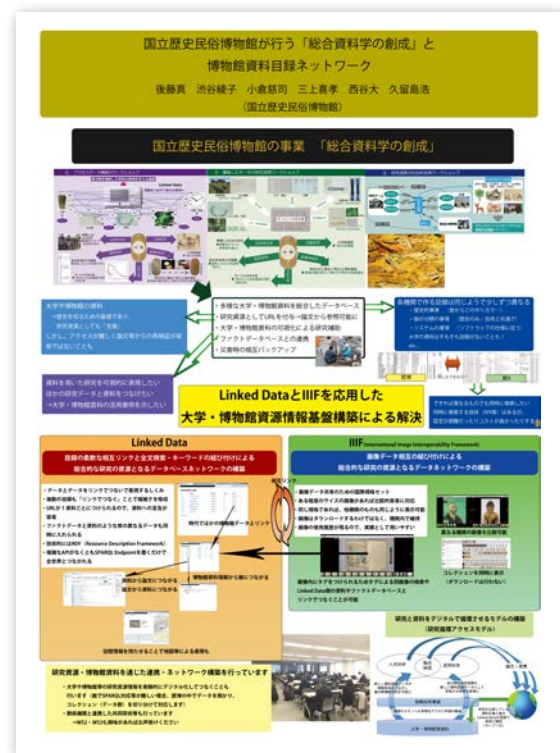
研究副代表 後藤 真

2016年（平成28）6月30日～7月1日にかけて大学博物館等協議会が広島大学・東広島キャンパスで開催された。大学博物館等協議会とは「会員相互の緊密な連絡と協力により博物館活動の進展に寄与し、当面する問題の解決を図っていくために大学付置の博物館や設置準備委員会、国立博物館等で創設された団体」（同協議会ホームページ）である。大学博物館の資料活用の共同研究という観点からも総合資料学の目的と合致するもので、歴博は今年度（平成28年度）より加盟、あわせて行われる「日本博物科学会」でポスター発表を行なった。

ポスター発表では、「国立歴史民俗博物館が行う『総合資料学の創成』と博物館資料目録ネットワークについて」という題名で、ワークショップ1の状況を中心に発表した。大学博物館の皆様より多数の質問をいただき、今後の総合資料学の糧になるとともに、多くのご興味をいただき、今後の共同研究の可能性を開くものであった。また、ほかの大学博物館関係者の発表では、総合資料学研究と密接にかかわるものもあり、こちらも共同研究への可能性を作り出すことができ、文理融合型研究の枠組みを設定するよききっかけとなった。

日本博物科学会ポスター発表

国立歴史民俗博物館が行う「総合資料学の創成」と博物館資料目録ネットワークについて
(後藤 真・渋谷綾子・小倉慈司・三上喜孝・西谷 大・久留島浩 (国立歴史民俗博物館))



ポスター「国立歴史民俗博物館が行う「総合資料学の創成」と博物館資料目録ネットワーク」



ポスター発表の様子



全国歴史民俗系博物館協議会 第5回年次集会（報告）

日時 2016年7月7日(木)～7月8日(金)

場所 石川県立歴史博物館・石川県立美術館

メタ資料学研究センター長・研究代表 西谷 大

2016年（平成28）7月7日（木）・8日（金）の両日、全国歴史民俗系博物館協議会（歴民協）第5回年次集会が、石川県立歴史博物館および石川県立美術館のホールで開催された。

全国歴史民俗系博物館協議会（大学付置の博物館も含む）の起ち上げは、東日本大震災を契機としている。科学系、美術系、動物園・水族館などの館が、それぞれの館種別組織を持っているのに対して、歴史民俗系の全国的な組織がなかったから、である。

この組織の目的は、歴史民俗系の博物館が、相互の交流と連携をはかることによって、地域社会の基盤である歴史・文化を、いかにして守り未来へ残していくかを探りながら、実践的に行うことを目指していくことにある。

年次集会には全国各地からおよそ100名の方が参加された。今回のテーマは、「被災文化財の再生」と「博物館・

リニューアルの時代」の2つである。

（詳細は 歴民協ホームページ<http://www.rekimin.com/> 参照）

総合資料学は、大学付置の博物館や全国各地の博物館の資料を研究の対象としている。3年前から、総合資料学を進めるにあたって、ご協力をお願いしていた。今回は目的に加えて、これまでの実績と現在の進捗状況について説明し、皆様から貴重なご意見をいただくとともに、改めて総合資料学の推進について、ご賛同を得ることができた。

今回の年次集会に参加して、全国の博物館では、災害時の資料のレスキューや、地域文化の復旧、それに博物館のリニューアルを行うには、明確な理念とともに、新たな資料の保全、活用のための研究が必要不可欠だと痛感した。それだけに、総合資料学の果たす役割は大きいと感じた。



歴民協年次集会の様子



歴民協年次集会での報告

海外での報告

PNC (Pacific Neighborhood Consortium) (報告)

日時 2016年8月16日(火)

場所 Getty Center (アメリカ)

研究副代表 後藤 真

2016年(平成28)8月17日、PNC (Pacific Neighborhood Consortium) 2016がアメリカ・ロサンゼルス市のGetty Centerにて開催された。

そこで、メタ資料学研究センターから後藤が参加し、世界中の大学および博物館関係者に総合資料学のシステムについて発表を行なった。

また、現地ではGetty Museumのメタデータ構築およびIIIFの構築について、それぞれご報告をいただき、討論を実施した。Gettyのデジタル化やメタデータの事例は、歴史が進める総合資料学の情報基盤構築にとっても大変有益なものであった。

国際会議終了後、UCLA (カリフォルニア州立大学ロサンゼルス校) の東アジア図書館の見学にもいき、日本資料の状況をご紹介いただいた。

PNC2016 Aug-17

Session: Institutional Linked Open Data

Constructing Large-scale Cultural and Research Linked Data

Makoto Goto, National Museum of Japanese History, Japan

EAJRS (日本資料専門家欧州協会) (ワークショップ)

日時 2016年9月14日(水) ~ 9月17日(土) (16日に機関ワークショップ実施)

場所 ブカレスト大学中央図書館 (ルーマニア)

メタ資料学研究センター 渋谷 綾子

2016年(平成28)9月14日(水)~17日(土)、ルーマニアのブカレスト大学中央図書館で開催された日本資料専門家欧州協会 (EAJRS, European Association of Japanese Resource Specialists) へメタ資料学研究センターの後藤・渋谷が参加し、機関ワークショップを実施した。

EAJRSは欧州における日本分野の図書館資料・情報資源に関心をもつ司書や研究者等の専門家によるグループであり、毎年9月頃に年次大会が開催されている。今大会のテーマは「日本資料図書館の国際協力 (International Cooperation Between Japanese Studies Libraries)」で、参加者は約50名、参加国10か国以上 (アメリカ・イギリス・ノルウェー・ルーマニア・フランス・オランダ・ロシア・ドイツ・リトアニア・日本など) である。国立歴史民俗博物館は今回から初めて参加し、総合資料学の紹介と研究協力の相談を行なった。

大会発表は11のセッションに区分され、ブカレスト大学やルーマニアの日本研究も含めた34本の発表があり、うち9本の発表は資料の組織化や目録の作成、デジタル化資料やデータベースの活用について取り上げられた。内容については、デジタル・ヒューマニティーズ等の最新動向、画像資料のデジタル化に関する成果、国際交流や国際協力、在欧和古書保存プロジェクトの報告など多岐にわたっていた。さらに大会中は、Complexul Muzeal AradでKuchi-

exhibition、Romanian Academy Libraryで所蔵されている浮世絵コレクションの見学なども行われた。

機関ワークショップは16日(金)午前であったが、大会中は毎日ブースを設営し、参加者に対して説明を行うことができた。16日当日は、総合資料学の概要と今後の計画、歴史のデータベースの紹介を行なった。

全体的な成果として、ヨーロッパでは日本の資料への興味が非常に高いことがわかった。これは、日本研究に対して英語でアクセスできることの需要の大きさを示している。さらに、英語での宣伝・広報は海外でのプレゼンスをより高めるといふ指摘もいただき、英語化の重要性を実感させられた。IIIF (International Image Interoperability Framework、画像閲覧のための国際相互運用の枠組み。このしくみを活用することで簡単にデータの相互閲覧を可能にすることができる) などの画像データへの期待の高さも見受けられ、洛中洛外図屏風人物データベースなどのすでに作られているデータベースの実演は参加者たちの興味を強くひいたようであった。共同研究や出版などの誘いも受けるなど、今後につながる多くの成果を得られたと思う。

次回大会はノルウェーのオスロで2017年9月13日から16日の日程で開催される。



ワークショップでの総合資料学の説明



英語での説明の様子

他機関における活動のご紹介

千葉大学と国立歴史民俗博物館の包括的連携協力協定の目的と目標について

千葉大学 崎山 直樹

千葉大学と国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略）は共に千葉県にあるため、これまでも研究者間の共同研究など交流が盛んに行われてきた。また近年では、文学部や教育学部の新入学生のオリエンテーションで訪問するなど、教育目的での利用も増えてきた。最新の研究に基づいた歴博の展示は、これから人文学を学ぶ若人にとって、視野を広げ、専門領域の奥深さを理解するのに最適な博物館である。さらに歴博が扱う時代の広さも魅力の一つである。考古学、歴史学、民俗学を網羅的に扱うだけでなく、時代的にも先史時代から現代までを扱う歴博の展示は、日本について興味関心を持つ留学生が訪問するのに相応しい博物館である。2010年度には千葉大学と歴博の教員が短期留学生を約1年にわたり指導し、日本の歴史や民俗に関する展示を母国語でわかりやすく解説するシートを作成するというプロジェクトを実施した。本年度は大学教員、大学生、NPO、高校教員が協働し、「佐倉で学ぶ日本の歴史の基礎」ツアーとして、現高校1年生の外国人生徒を対象に、「日本史」を学ぶための予備知識を学ぶ企画を計画するなど、教育の対象も拡大しつつある。

このように歴博と千葉大学との間には長年にわたる交流の実績が存在していた。そしてその関係を更に深めようとする機運が高まり、2016年10月に歴博と千葉大学との間で包括的連携協力協定を結ばれた。もちろんそのきっかけは「総合資料学の創成」であった。大学や歴史系博物館が持つ資料を多様な形で分析・研究する学問として、「総合資料学」を確立することを目的とするこの研究プロジェクトに、組織として協力することは、歴博、千葉大学の双方にとって多大なメリットがあると考えられる。

この協定の目的は2つに要約されるだろう。1つに歴博にとってのメリットとして、「総合資料学の創成」に必要な不可欠な自然科学系の研究蓄積ならびに学知を、千葉大学を通じて提供できること。もう1つのメリット、これは主に千葉大学側のメリットとなるが、「総合資料学」という新しい学問領域の知識を学部教育に提供できるという点にある。

「総合資料学」は人文学、自然科学、情報学の分野を超えた新たな日本史像の構築、学問領域の創成を目指す取り組みである。そのためにも自然科学の研究者が組織的に関わり、問題関心の共有、情報の交換といったコミュニケーションを促進していくことが必要となる。千葉大学は人文・社会科学、自然科学、生命科学の領域を幅広くカバーする10学部からなる総合大学である。理学部、工学部のみならず園芸学部という特色のある学

部に、様々な研究者が所属しており、歴博が推進する「総合資料学」の発展に寄与できるであろう。ただし大規模な組織ゆえの問題として、組織内部での情報共有はうまく行っているとは言い難く、組織としての取り組み方については今後の課題となっている。

また教育に関しては、まずは一般教育（千葉大では普遍教育と称している）として「博物館で歴史を読み解く」という科目を開講することになった。なぜ学部専門科目ではなく一般教育の枠組みで提供するのかというと、学際的なアプローチを特徴とする「総合資料学」の性格を考えると、全学部の学生を対象とする一般教育の方が向いていると判断したからである。また一般教育といっても千葉大学の場合、学部初年次のみならず、高年次まで継続して履修することが推奨されている。そのため単に学部の専門教育を受けるための基礎教育というだけでなく、専門教育受け、専門知識やスキルをある程度身につけた段階で、改めて様々なディシプリンや現代社会の課題に向き合うことで、学生の視野を広げることを目標としている。

今回歴博の協力の下に開講する「博物館で歴史を読み解く」という科目は、「総合資料学」とは何かを学ぶことを目的とし、歴博の企画展を題材に、常設展示やデータベース上の情報と結びつけ、新たな展示内容を検討するというPBL (Project Based Learning) 型の科目となっている。現在、大学教育ではこのようなPBLといったアクティブ・ラーニングの手法の開発、実践が進んでいる。その際に重要なことは、単に手法を導入すればいいということではなく、それを通じて通常の座学では学びづらいことや定着しにくい知識が身につくように設計しなくてはならないという点にある。その点からすると歴博の協力の下に開講する「博物館で歴史を読み解く」という科目は、現在進行形の学問である「総合資料学」とはどういうものなのかを、そこに関わる専門家のアドバイスを得ながら、学生たちが自らの頭と手を使いながら体験できるものとなっており、理想的な形と言えよう。

今後の課題としては、普遍教育での実践を通じて得られた知見を、学部での専門教育へと繋げていくこと、さらには他大学や社会へと波及させていくこととなる。特に筆者が所属している国際教養学部は文理混合、課題解決型の教育を掲げており、「総合資料学」との親和性が高いと感じている。新しい学問領域を新しい学部で専門教育を通じて提供できるよう、今後も連携関係を強固にすべく協力していきたいと考えている。



国立歴史民俗博物館と千葉大学の包括的連携協力調印式
(中央左：久留島館長 中央右：徳久学長)



国立歴史民俗博物館後藤藤彦教授による集中講義
「博物館で歴史を読み解く」ガイダンスの様子

総合資料学奨励研究「地域歴史資料の研究利用促進にむけた環境整備の試み —佐賀大学附属図書館所蔵小城鍋島文庫「小城藩日記」データベース構築—」について

佐賀大学地域学歴史文化研究センター 伊藤 昭弘

本研究は、佐賀大学附属図書館が所蔵する小城鍋島文庫のうち、「小城藩日記」と呼ばれている史料について記事データベースを作成し、「小城藩日記」の研究利用を促すことを目的としている。小城鍋島文庫とは、佐賀藩初代藩主鍋島勝茂の長子（正室の子でなかったため、藩主の座は継げなかった）・元茂が小城郡を中心に所領を得て成立した「小城鍋島家」（佐賀藩には鍋島家が数多くあるため、研究では所領の地名などにより「～鍋島家」と呼ぶことが多い）に伝来した文書・典籍類である。もともと小城鍋島家や旧藩校などにあった史料が、佐賀大学附属図書館に寄贈された。

小城鍋島文庫に含まれている日記は、佐賀藩研究者や地元では「小城藩日記」と呼ばれる。小城鍋島家は佐賀藩主から知行を得た家臣のひとりであり、徳川将軍家との直接の主従関係はない。しかし佐賀藩の家格「三家」の同家、蓮池鍋島家（勝茂の三男直澄が興す）、鹿島鍋島家（勝茂の弟忠茂が興し、勝茂の九男直朝が継ぐ）はいずれも江戸に屋敷を構えて参勤し、軍役も果たした。江戸時代に流布した旅行用の地図などにも「三家」は大名、「三家」の拠点である小城・蓮池・鹿島は城下町であるかのように描かれることが多く、当時の人びとの目にも大名と映っていた。そのため研究上は「支藩」と呼ばれ、「～」藩とされることが多い。ただ行政面など佐賀藩に大きく制約されており、いわゆる「藩」のイメージとは異なる。

「三家」それぞれに史料が伝来しており、小城鍋島家だけでなく、蓮池・鹿島鍋島家も膨大な日記が残されている。とりわけ蓮池鍋島家のそれは、小城藩日記が年1～2冊であるのに対し、年4～6冊あることが多い。記事内容も豊かで、かつ佐賀県立図書館のデータベース（<http://122.249.164.188/>）で画像が公開されており（「請役所日記」で検索すると出てくる）、研究利用の促進が期待される。

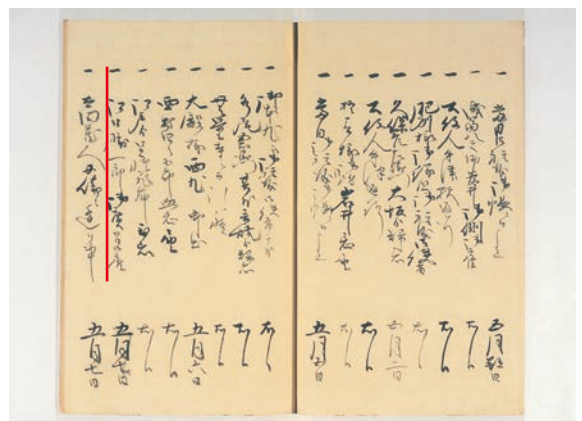
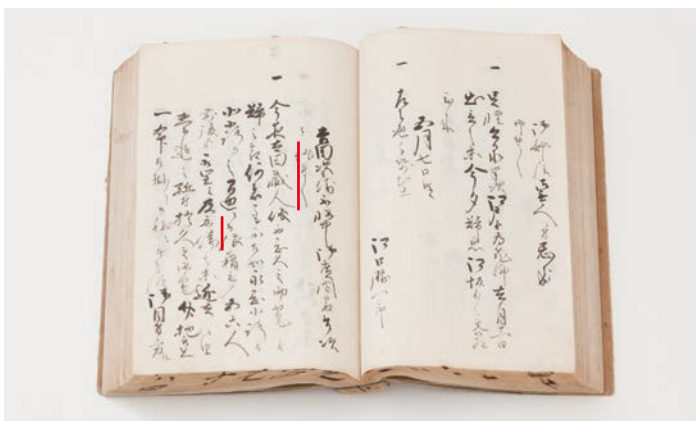
「三家」以外にも、佐賀藩では「親類」（勝茂の息子など）、「親類同格」（もと鍋島氏の主君・龍造寺氏の家系）、「家老」「着座」（大組頭に就く）といった大身家臣の家々の日記が、数多く残っている。しかし筆者が感じるのは、日記はとにかく読み込むことが必要であり、一日かけて何冊読んでも、自身の研究にかかわる記事がゼロだった、ということもザラである。蓮池鍋島家の日記もウェブで公開されているとはいえ、佐賀藩研究を志す人以外

にとっては、ハードルが高いだろう。

日記資料の利用を促すには、どうしたらいいか。その答えとして筆者が考えたのが、記事目録の作成である。しかし、現在筆者が在籍する地域学歴史文化研究センターでは蓮池鍋島家日記のうち特定の内容についてのみ記事を拾い、目録を作成しているが、前述の通り膨大な量のため、なかなか進まない。その点小城鍋島家の日記には、「日記目録」（画像が佐賀大学附属図書館ウェブサイトで公開されている。<http://www.dl.saga-u.ac.jp/OgiNabesima/nikkimoku.htm>）と題された史料が江戸時代に作成されていた。恐らく行政などの過去の事例をあたる時、便利のように作られたのだろう。

そこで本研究では、「日記目録」をデータベース化することにより、「小城藩日記」を利用するさいの入口として、近世史研究者に利用してもらい、さらには「小城藩日記」を入口として、蓮池鍋島家の日記など佐賀県立図書館データベースで画像公開されている史料にも関心を持ってもらうようにできないか、と考えた次第である。「小城藩日記」は天和2年（1683）から慶応4年（1868）にかけ計113冊（連続はしていない）あり、「日記目録」も寛文元年（1661）から慶応元年（1865）まで計32冊（同）が伝来しており、現在2冊目の途中、正徳5年（1715）5月までの目録を翻刻したが、ここまででも記事数は3千を超えている。「日記目録」全てをデータベース化すれば記事数は10万近くに達するかもしれない。気が遠くなる作業だが、今回の奨励研究のような国立歴史民俗博物館の支援を得ながら、時間をかけても完成させたい。

最後に、データベースを作成するにあたり、検索機能を単に文字テキストだけにしておけば簡単だが、それだと例えば佐賀藩主や家臣たちがヒットしない（実名ででたり、官途名・通称ででたりする）ケースがある。また、そもそも検索キーワードに苦慮することもあるだろう。そのため人名の統合（実名でも、官途・通称でもヒットする）や記事の分類（政治、農村など）を試みているが、やはり大変な作業である（今のところ手作業）。総合資料学のなかで、こうした課題の解決方法が簡素化できないか、と期待している。



元治元年の日記（左）と日記目録（右）。小城鍋島家の重臣・太田蔵人が暴漢に襲われた事件が記されている（傍線部）。暴漢の首魁・富岡敬明はのち山梨県権参事や貴族院議員などを歴任している。

研究メンバー一覧 (氏名/所属/分担課題)

◎ 研究代表者、○ 研究副代表者、各代表・コーディネーター以外のメンバーは五十音順に記載

総括

久留島 浩 (国立歴史民俗博物館)

WS1

○ 後藤 真 (国立歴史民俗博物館) * WS1代表

宇陀 則彦 (筑波大学)

大向 一輝 (国立情報学研究所)

岡田 義広 (九州大学)

五島 敏芳 (京都大学総合博物館)

新 和宏 (千葉県立中央博物館分館海の博物館)

関野 樹 (総合地球環境学研究所)

高田 良宏 (金沢大学)

研谷 紀夫 (関西大学)

山田 太造 (東京大学史料編纂所)

百原 新 (千葉大学大学院)

荒川 章二 (国立歴史民俗博物館)

内田 順子 (国立歴史民俗博物館)

小池 淳一 (国立歴史民俗博物館)

WS2

三上 喜孝 (国立歴史民俗博物館) * WS2代表

渋谷 綾子 (国立歴史民俗博物館)

岩崎 奈緒子 (京都大学総合博物館)

小川 正人 (北海道博物館)

栄原 永遠男 (大阪歴史博物館)

山家 浩樹 (東京大学史料編纂所)

青山 宏夫 (国立歴史民俗博物館)

荒木 和憲 (国立歴史民俗博物館)

小倉 慈司 (国立歴史民俗博物館)

高田 貫太 (国立歴史民俗博物館)

原山 浩介 (国立歴史民俗博物館)

日高 薫 (国立歴史民俗博物館)

松田 睦彦 (国立歴史民俗博物館)

WS3

◎ 西谷 大 (国立歴史民俗博物館) * WS3代表

阿児 雄之 (東京工業大学博物館)

伊藤 昭弘 (佐賀大学)

奥村 弘 (神戸大学)

崎山 直樹 (千葉大学)

篠原 徹 (滋賀県立琵琶湖博物館)

島立 理子 (千葉県立中央博物館)

宮武 正登 (佐賀大学)

藪田 貫 (兵庫県立歴史博物館)

大久保 純一 (国立歴史民俗博物館)

齋藤 努 (国立歴史民俗博物館)

鈴木 卓治 (国立歴史民俗博物館)

村木 二郎 (国立歴史民俗博物館)

前号「総合資料学ニューズレター」1号におきまして、研究メンバー一覧のなかで、北海道博物館の小川正人先生のお名前のふりがなが誤って記載されておりました。

正しくは「おがわ まさひと」です。

大変申し訳ありません。今後このようなことの無いように気を付けて参りますので、今後とも、引き続き共同研究「総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築」へのご助力を賜れますよう、よろしくお願いいたします。

メタ資料学研究センター・メンバーの紹介

センター長

西谷 大 NISHITANI Masaru

研究部・考古研究系 教授

専門分野 東アジア人類史（東アジアにおける生業の歴史、人と自然の関係史）

小倉 慈司 OGURA Shigeji

研究部・歴史研究系 准教授

専門分野 日本古代史、史料学（主要研究課題：古代神祇制度の研究、禁裏・公家文庫の研究）

三上 喜孝 MIKAMI Yoshitaka

研究部 准教授

専門分野 日本古代史（主要研究課題：東アジア文字文化交流史、古代地域社会史、貨幣史）

後藤 真 GOTO Makoto

研究部 准教授

専門分野 人文情報学・情報歴史学・総合資料学（歴史情報のデジタル化やデジタル・アーカイブ、総合資料学の構築など）

渋谷 綾子 SHIBUTANI Ayako

研究部 特任助教

専門分野 植物考古学、文化財科学（主要研究課題：先史時代人の植物利用と食生活の復元、植物食の健康への影響）

新刊紹介

知の集積、保存、共有 歴博発、日本の歴史研究を次のステージへ

2016年2月27日に開催されましたシンポジウム「資料がつなく大学と博物館—『研究循環アクセスモデル』の構築に向けて—」の記録集を刊行いたしました。

全国の大学や博物館が所蔵し、生み出してきた多種多様な資料。それらを学問の領域を超えた新たな視点で把握し、デジタルデータとして結びつけ、有機的に活用する異分野融合型研究「総合資料学の創成」。大学と博物館・図書館等の連携、デジタル技術を核とする次世代の歴史研究など概要と実践例を紹介し、今後の課題を示したシンポジウムの記録集。

国立歴史民俗博物館編 『〈総合資料学〉の挑戦—異分野融合研究の最前線—』

株式会社 吉川弘文館発行 2017年3月10日 A5版、3,200円（税込み）



歴博●関連する企画展

2017/1/11 (Wed) ~2/19 (Sun)

特集展示 (国際展示) 「台湾と日本—震災とともにたどる近現代—」

(国立歴史民俗博物館企画展示室B)

2017/3/14 (Tue) ~5/7 (Sun)

企画展示「デジタルで楽しむ歴史資料」

(国立歴史民俗博物館企画展示室A・B)



2016年10月～2017年度 メタ資料学研究センターの活動

以下は開催予定のもの

2016年度

2016/10/23 (Sun)・24 (Mon) ワークショップ3

(国立歴史民俗博物館 大会議室・アーカイブ室)

- ・報告1 「日本学と総合資料学—メタ資料学研究への期待と課題」
- ・報告2 「東北歴史博物館資料管理システムの理念と実際」
- ・歴民カード (歴史民俗資料調査カード) の閲覧

2016/11/13 (Sun) ワークショップ2

(神戸大学大学院人文学研究科A棟1階 学生ホール)

- ・報告1 「地域文化と菓草栽培の叢智：森野旧薬園から発信する生薬国産化のキーテクノロジー」
- ・報告2 「総合資料学と「文献史学」—中世日本国際交流史研究の立場から—」

2016/12/9 (Fri) ワークショップ1

(国文学研究資料館 オリエンテーションルーム)

- ・全体説明「国立歴史民俗博物館が進める「総合資料学の創成」と情報基盤—これまでの経緯を含めて—」
- ・報告1 「ICT活用による歴史学教材開発」
- ・報告2 「研究資源の蓄積と利活用を目指した学術資源リポジトリについて—ヴァーチャル・ミュージアムからサブジェクトリポジトリ、そして今後—」

2017/1/28 (Sat)・29 (Sun) ワークショップ3

(国立歴史民俗博物館 第一会議室/国立東京博物館)

- ・報告1 「研究会の趣旨と総合資料学の問題点」
- ・報告2 「総合資料学とシステム構築」
- ・報告3 「博物館資源と数値人文—以「臺史博」為例」
- ・報告4 「韓国博物館所蔵品統合DB構築事業と文化遺産標準管理SYSTEM」
- ・報告5 「国立博物館所蔵品統合検索システムと東京国立博物館でのデジタル化」及び展示調査

2017/2/11 (Sat) ワークショップ2

(国立歴史民俗博物館 第一会議室・第一調査室)

- ・報告1 「正倉院文書の複製を活用する」
- ・報告2 「中世古文書の多様な情報」
- ・報告3 「民俗研究における文書の扱い」
- ・報告4 「古文書を顕微鏡で観察する」

2017/2/13 (Mon)～15 (Wed) 千葉大学総合資料学関連授業 (集中講義「博物館で歴史を読み解く」)

2017/3/20 (Mon) 全体集会

(東京工業大学 レクチャーシアター〈西5号館3階W531講義室〉)

開会・趣旨説明/西谷 大 (国立歴史民俗博物館)

講演・対談「デジタル時代の歴史実践：総合資料学の未来」

小澤 弘明 (千葉大学)・久留島 浩 (国立歴史民俗博物館)、聞き手/西谷 大

活動報告1/後藤 真 (国立歴史民俗博物館)、コメント/宇陀 則彦 (筑波大学)

活動報告2/三上 喜孝 (国立歴史民俗博物館)、コメント/原山 浩介 (国立歴史民俗博物館)

活動報告3/西谷 大 (国立歴史民俗博物館)、コメント/齋藤 努 (国立歴史民俗博物館)

総 評/岩崎 奈緒子 (京都大学総合博物館)

全体討論



2017年度

2017/4/8 (Sat) 歴博講演会第399回 (鈴木卓治 国立歴史民俗博物館)「ザ・メイキング オブ デジタルで楽しむ歴史資料」

2017/5/13 (Sat) 歴博講演会第400回 (渋谷綾子 国立歴史民俗博物館)「晩ご飯は何? 資料のデンプンから採る昔の食べ物」

2017/6/22 (Thu)・23 (Fri) 第20回大学博物館等協議会・第12回博物科学会 (山形大学・小白川キャンパス)

2017/7/13 (Thu)・14 (Fri) 第6回全国歴史民俗系博物館協議会年次集会 (九州国立博物館ほか)

2017/8/8 (Tue)～11 (Fri) DH2017 (McGill University モントリオール〈カナダ〉) <https://dh2017.adho.org/>

2017/8/30 (Wed)～9/2 (Sat) 第15回 EAJIS 国際会議 (リスボン〈ポルトガル〉) <http://www.eajis.eu/>

2017/9/13 (Wed)～16 (Sat) EAJRS 日本資料専門家欧州協会 (オスロ) <http://eajrs.net/>

2017/9/25 (Mon)～29 (Fri) iPress 2017 第14回電子情報保存に関する国際会議

(京都大学国際科学イノベーション棟〈吉田キャンパス本部構内〉) <https://ipres2017.jp>

*ほか、2016年度同様にワークショップや博物館調査などを行う予定です。

総合資料学ニュースレター 第2号 2017年(平成29)3月21日 発行

編集発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立歴史民俗博物館 メタ資料学研究センター

〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117番地
TEL 043-486-0123 (代表) <http://www.metaresource.jp/>

印刷 株式会社 正文社